論　文

浪費とその時代
― Siniawer, Eiko Maruko.（2018）. *Waste: Consuming Postwar Japan*. Cornell University Press. を読む―

森　道哉

Waste and its Age: A Review Essay on Siniawer, Eiko Maruko. (2018). *Waste: Consuming Postwar Japan*. Cornell University Press.

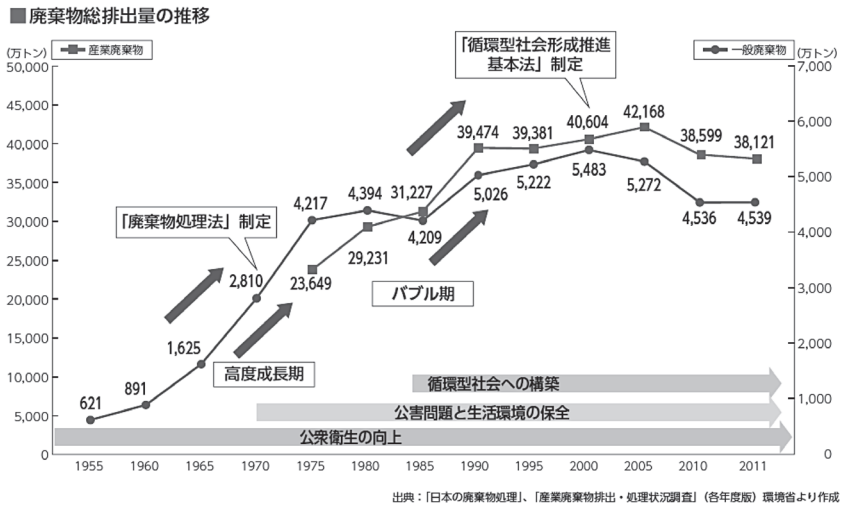
Michiya MORI

Abstract

Waste: Consuming Postwar Japan by Eiko Maruko Siniawer is not only beneficial to understand how people in particular, who identify themselves as middle-class as well as the mainstream for a long time, have faced affluence but with its related complaints since the Pacific War while considering waste, waste consciousness, and wasteful concerns such as electricity, food, money, and time, but also insightful to think about how the book tries to add a new page of a history of postwar Japan while using rich materials such as news articles, manga, pamphlets, the officials' reports, and her field notes. This paper is a review essay regarding Siniawer's book and some reactions to it. First, this study examines implications of the concept of "waste" concerning researches while specifically associating them with environmental problems, policies, and politics. Second, in the course of briefly referring to and discussing the book reviews as follows: Simon Avenell in *Social Science Japan Journal*, Mary A. Haddad in *Pacific Affairs*, Nick Kapur in *The Journal of Asian Studies*, and Patricia L. Maclachlan in *The American Historical Review*, this paper mainly adds two points to the discussions mentioned above in order to further consider *Waste*. The points of the arguments are related to the background of the four-part periodization of postwar Japan and the way of understanding "middle-class" in her book. This paper aims to contribute for future researches in terms of "waste," environmental politics, and some related studies through some critiques.

1. はじめに

ごみ・廃棄物の扱われ方やその動向を知ることは、日常生活とのかかわりのなかで環境問題や政策を見る際の起点の一つとなりうる。廃棄物は、「廃棄物処理法」によって一般廃棄物と産業廃棄物に大別されている。最新の『令和 2 年版環境白書･循環型社会白書･生物多様性白書』によると、一般廃棄物の総排出量は 2018 年度に 4272 万トン、産業廃棄物のそれは 2017 年度に 3 億 8600 万トンであった（環境省 2020: 209-228）。戦後のそれらの排出量は、高度経済成長やバブル経済の時期での急増も経験しながら増加基調となった一方、「循環型社会形成推進基本法」も制定された 2000 年頃からの総量は、産業構造の変化や景気変動などを受けて減少傾向となり（環境省大臣官房廃棄物･リサイクル対策部企画課循環型社会推進室 2014: 15。図「廃棄物総排出量の推移」は、同頁から引用）、今日に至るまでそれが続いている。



全体的な状況を見ると、社会経済環境の変化のなかで、時代を追って「環境」に包摂される事象が増え、対策が講じられてきたことがうかがえる。他方、その部分的な状況に留意すると、たとえば、近年のジャーナリストの克明な報告にもあるように、食品ロス・廃棄物の削減は、日本社会が抱える深刻な課題となっている（中村・藤田 2019）。この点にかかわって、2020 年度の日本行政学会の分科会でも国内外の動向が報告されている（森道哉 2020a）。

岩波（2020a）は、EU の政策にも影響を与えていると見られる 2016 年のイタリアの食品廃棄物削減法の立法化が、1990 年代からの国政レベルでの問題意識の持続や食品の回収・譲渡の取り組み（財政、民事責任、保健衛生）のなかで行われたこと、またそうした実績を踏まえて、同法が社会への余剰食品に関する寄付を促す誘因を与える仕組みとして成立したことなどを論じた。それには医薬品の寄付も含まれ、社会的連帯という観点が組みこまれている点は興味深く、家庭や学校における課題はあるものの、政策が実績を上げつつある様子が日本への示唆と

合わせて提示されている。

また澤（2020a）は、2019 年 10 月に施行された「食品ロス削減推進法」に記載されている「基本方針」に、自治体への詳細な計画策定の義務付けがあることを見いだし、「中央値」としての事例たる岡山県および県内自治体のその執行状況の考察から、それらが余力がないなかで対応に困り、義務付けを「拒否」していることを具体的に論じた。しかしそれは、同法が枠組みなどを示すことにとどまって規制事項を含んでおらず、かつ自治体の意向確認などの機会を十分に持たない議員立法であることに内在する問題だと指摘している。

両者の議論は、「食品ロス・廃棄物の削減政策」をめぐって分析対象とする国やアクターなどが異なるものの、法律や条例を逐条解説的に確認した上でそれぞれの議論につなげている点で類似している。また食品ロス削減推進法の性格が、「基本法」あるいは「政策推進型法律」となっている点を立法政策の課題と見ている点も共通しており、活発な質疑応答が行われた（岩波 2020b; 澤 2020b; 藤井 2020; 森道哉 2020b）[1]。

環境問題の一分野として位置づけられるごみ・廃棄物（waste）はこのように、巨視的にも微視的にも検討されることで、「環境」の理解を深めることに寄与してきている。ただ、ごみ・廃棄物を浪費（waste）と関連づけて戦後を眺めれば、実態としても概念としても、「環境問題の一分野」に収まりきらない広がりが出てくる。歴史学の視点からのシナワの近著『浪費――戦後日本を消費して』は、こうした気づきを豊かな記述によって与えることに成功している。

以下では、本稿を書評論文としてシナワの議論の概略を掴みながら、若干の検討を加える。本書については、日本の事情に詳しい海外の複数の歴史学者や政治学者による書評が行われていることから（Avenell 2020; Haddad 2019; Kapur 2019; Maclachlan 2020）、適宜それらも参照しながら議論を進める。

2. 浪費という着眼点から描く戦後史

前節は、「waste」を「浪費」というよりも「ごみ・廃棄物」として、広義には、環境問題や環境政策との関係性に焦点を合わせた記述から入った。それは、行政および政治との関係でそれらを考察する筆者の研究関心に引きつけて本書を読もうとしたことの表れであると同時に、「浪費」という視点から「waste」を見ることに刺激を受けた表現でもある。もちろん、ごみ・廃棄物として「waste」を見るのは、オーソドックスな把握の仕方の一つで、それを凝視する研究上の意義もある。廃棄物法制を「30 年の長きにわたって」研究してきた北村喜宣は、その魅力について、「廃棄物というモノの向こう側に、人間の『業』のようなものがさまざまな形で現れているからではないかと思う」と表現している。というのもそれは、北村が「不要物」としての廃棄物や廃棄物法制のみならず、それにかかわる「行政過程」に現れる「排出事業者、処理業者、コンサルタント、規制行政機関、警察、住民」を見ているからである（北村 2019: v）。

ごみ・廃棄物を長期的な文脈において捉える視点で共通しながら、北村の言葉を借りると「住民」、またその生活に多大な注意を払って論じているのが本書である。だが、そのシナワの主

題としての「waste」という単語の指す範囲は、ごみ・廃棄物を含むけれども、それよりもかなり広い。たとえば、ケンブリッジ英語辞典によると、その語義は、「お金、モノ、時間、エネルギー、能力などの不要なまたは不適切な利用（an unnecessary or wrong use of money, substances, time, energy, abilities, etc.）」と解されるものである。

シナワの視線は、名詞、形容詞、そして動詞でもある多義的な「waste」の個々のモノ・コトの違いを超えて、その語に残る価値（value）にあり、さらにはそれを規定する時々の世相や文脈に向けられている。なぜなら、あらゆるモノ・コトは、不要にも無駄にもなりうると考えられることから、シナワが「日常のなかで意義深い何かを発見するために、不要・無駄である何かを慎重に理解する」（p. 2）という関心を持つことを重視するためである。本書ではさらに、無駄な・浪費的なといった意味を持つ形容詞「wasteful」と結びついてきたモノ・コトも丹念に取り上げながら、社会的かつ文化的な観点から戦後日本の理解に貢献することが目指されている。具体的には、ごみ・廃棄物の処理、自然資源の浪費、余計な出費、余暇時間の活用などに関する例をふんだんに引きながら、1940 年代半ばから現在に至るまでの「waste」への人々のかかわり方や、今日において「もったいない」に代表される不要なモノ・コトへの意識、すなわち浪費意識（waste consciousness）の変容などについて詳述し、それを達成しようとするのである（pp. 1-15）。

本書の構成はすぐ後に確認するが、シナワの 400 頁近くに及ぶ浪費の叙述から浮かび上がってくるのは、次の点である。それは、戦後の豊かさがもたらした生活様式の恩恵を享受する中間層（middle-class）の持つ欲とその根深さを示したこと、しかし、経済的な成功の維持にかかる手間や費用、そしてそれらがもたらす欲求不満の受け入れ難さが残ってきたこと、である（pp. 14-15）。浪費の戦後史から見ると、「環境問題の一分野」としてのごみ・廃棄物は、往々にして過剰に消費された結果としてのモノであり、消費される過程としてのコトともかかわっていることをより明瞭に意識できる。本書に「刺激を受けた」と先に述べたのは、一義的にはこのような意味においてである。

本書は、序章および終章と 4 部（全 10 章）で構成されている。各部は、シナワが設定する四つの時代区分に対応している。特に謙遜しながらも、簡にして要を得たアヴェネルの整理に依拠して（Avenell 2020）、行間を補足しながら概要を確認することにしたい。

1945 年から 1971 年を対象としている第 1 部（1-2 章）は、「再民主化と再啓蒙」を掲げている。太平洋戦争の直後から 1950 年代頃には、19 世紀後半から 20 世紀初期にかけて馴染んだ健康、衛生、能率、合理化といった用語が、雑誌や新聞、また専門家などを通じて流布していった。この文脈では、どのように家庭や職場で浪費意識が強調されていったのかが語られ、さらには、占領下での不要なモノ・コトの除去が再民主化や再啓蒙の試みと結びついていたことも論じられている。またそうしたなかでの合理化の努力が、鳩山一郎首相が主導した 50 年代の新生活運動（New Life Movement）につながっていた一方で、無駄の削減がより大きな買い物をするという目的のための節約であった点なども明らかにされている。

1950 年代後半から 1960 年代にかけては高度経済成長期を迎えており、いわば消費の新時代

への移行期であった。先に触れたような合理化や健康、衛生といった従来の「確立された価値」に紐づいた考え方は、その時期に緩んでいくこととなった。加えて、人々の浪費することへの過度の関心は、節約を美徳というよりも、無粋で気前が悪いものとして見るような状況を作りだした。だが60年代後半には、ごみ・廃棄物の処理問題がより顕在化してくる。しかしそれでも人々は、概して消費量を減らしたり、消費の仕方を変える方向には向かわなかった。消費活動は一定の批判を伴ったけれども、一度人々の生活やアイデンティティに根づくと、簡単に改められなかった経緯が描かれるのである。

「ショック、変化、対策」と題する第2部（3-4章）は、1971年から1981年を扱っており、特に70年代前半は、戦後史において枢要な時期であったと指摘されている。記述の焦点が合わせられているのは、江東区と杉並区の間で生じていた廃棄物の処理をめぐる紛争、いわゆる東京ごみ戦争である。美濃部亮吉都知事が都議会でそれを宣言したことで注目で浴びたが、そのコミットメントは1973年のオイルショックと合わせて、大量のごみ・廃棄物が経済成長と人々の消費活動に絡む社会問題となっているとの理解を、多くの人々に導いていったとされている。

シナワが鋭いのは、アヴェネルも指摘するように（Avenell 2020: 2）、政治家も消費者も、消費を減らすより険しい道をいくこと、すなわち自ら豊かさの享受を制約することへの意思は持てず仕舞いで、焼却といった技術的な解決に流れていったことを説得的に論じていることである。また合わせて、中間層の主婦に着目しながら、リサイクルや資源保護を積極的に生活につなげていく「ケチケチ運動」が、ごみ・廃棄物問題への魅力ある代替案となっていた様子が記述されている。他方で、トヨタのような企業にも動きがあったのがこの時期である。オイルショックの余波のなかで、エネルギー費用の増大に直面した会社は、慎重な資源の使用が求められるようになり、職場の効率を上げる戦略を求めていったのであった。

第3部（5-7章）「豊かさの二元性」は、1980年代を中心に、1990年代に入った頃までが考察されている。バルブ経済を背景により豊かになった日本の日常のなかで描かれるのは、快適な自己充足（complacency）の行き着く先としてのごみ・廃棄物を生み出した、社会的、経済的、文化的な諸力というよりも、社会がごみ・廃棄物それ自体の管理やリサイクルの促進に関心を移していく様である。皆が揃ってその道を選んだわけではないとはいえ、物質的な豊かさよりも、心の豊かさに関心が寄せられていったことが強調されるのである。80年代半ばには、ごみ・廃棄物の分別の文化への批評があったことを確認しつつも、若者の間で人気を集めた古着屋や蚤の市などへの注目があったことが語られる。

この頃には、より心理的な、もしくは精神的なことに目を向ける人が増えてきており、不要なモノ・コト（waste）に向き合う際には、自己満足（self-satisfaction）、幸福、自由時間といった「ゆとり」で括れるような要素が重みを増していた。そうした状況の理解は、ミヒャエル・エンデの『モモ』の含意を汲み取ることで補強されている。多くの人がその本を手に取ったのは、「浪費意識の浸透やその論理、またそれが生み出す社会に対する反応」だけでなく、「持続的な生産性の容認や経済成長と繁栄のための効率性に対する反応」でもあったと解釈されている（p. 220）。

「心の豊かさ」でまとめる第 4 部（8-10 章）は、1990 年代から現在まで続く時期への言及となっている。「失われた 10 年」（p. 225）のなかで、エネルギーや資源を節約する考え方が、どのように環境への意識の高まりに結びつけられていくのかが明らかにされている。若者を中心により多くの人が中古品を買うようになるにつれて、それらを使用することへの抵抗感は弱くなったし、そのような動きは、90 年代を通しての政府による循環型社会の促進や関連法の制定によって、正当化されていったのである。

こうしたなかで魅力を増してきた「もったいない」に関する議論も積極的に展開されている。それが、モノとしてのごみ・廃棄物にとどまらず、何がしかの行為などとしてのコトまでを含む、浪費意識を凝縮する便利な用語の地位を占めることになったからである。ここまで見てくると、浪費意識（waste consciousness）は、「30 年にわたって、作られ、再利用され、擦れきれ、貶められ、再び流行り、そして再整理され」てきたということになる（p. 242）。小泉純一郎首相が度々「もったいない」に触れ、近年では「断捨離」など、不要なモノ・コトを整理する言葉も耳にするようになったが、そうした議論の背景には、「裕福と不安定、安楽と不安、過剰と不足」の同時存在の状況があることが指摘されている（p. 293）。

本書は、つまるところ、ごみ・廃棄物の行方に気を留めながら、総じて豊かさと浪費意識の変容を解明し、戦後日本の経験のなかに、解消しきれない人々の葛藤が残っていることを見いだしている。「waste」という用語の持つ意味の豊かさを読者に振り返る手がかりを与えてくれると同時に、経済発展のなかで、中間層が自らの選択によって一喜一憂した日常があったことを活写しているのである。

3. 時代区分の背景にあるものへの関心と中間層の像について

本書の学術的な貢献は、浪費（waste）という分析視角の設定にあり、かつその概念が許容する限りの分厚い記述で戦後史を描いている点にある。浪費意識に影響を与えたジェンダーの役割に気を配りつつ（pp. 9-10）、中間層の生活の変容が、四つの時代区分の下で捉えられているのである。専門書はもとより、新聞、雑誌、漫画、パンフレット、公的資料、自身の調査ノートなどに支えられた、多彩かつ詳細な知見は読み物として面白い。それゆえにかえって、筆者を含む複数の評者がその紹介に手こずったようにも見えるが、歴史学としての浩瀚な本書の野心的な取り組みは高く評価されている（Avenell 2020; Kapur 2019; Maclachlan 2020）。というのもその議論が、時々の生産や消費の様式が、環境、社会、そして政治といったシステムを極限にまで追いつめてきたことへの自省を、読者に迫るものともなっているためである（Haddad 2019）。

もちろん、書評として提示されている論点や疑問点もある。以下、可能な限り各評者の議論を組みこみながら、しかし、それらにおいて明示的に触れられていない相互に関連する 2 点に絞って、残された課題として例示することにしたい。なお、ここでの記述の焦点は、ごみ・廃棄物あるいは、浪費といった「waste」の個々の理解というより、それらの包括的な理解にか

かわる事柄にある。

本稿で検討したい論点の第1は、「時代区分の背景にあるものへの関心」についてである。シナワは、1945年から1971年まで（第1部）、1971年から1981年まで（第2部）、1980年代から1990年代初期の頃まで（第3部）、そして1991年以降現在まで（第4部）という区分に沿って、本書の課題を考察している。各書評が気にかけているいくつかの論点について、どの時期にあたるのかを確認しつつ検討し、その後、本稿での問題意識についても見ていこう。

日本政治を専門とするマクラクランは、たとえば、食品廃棄物や商品の過剰包装の問題は1970年代、1980年代を超えて近年にまで及んできているが、その点についての追跡が不十分ではないかと問うている。具体的には、市場に関する要因の検討が不足しているために、ごみ・廃棄物と豊かさをめぐるダイナミックな関係を捉えきれていないのではないかというのである（Maclachlan 2020: 1007）。確かに、過剰包装に関するシナワの議論は、後続の時期にもリサイクルなどとの関係で散見されるものの、上記の時期に集中的に著されるにとどまっている。マクラクランは人々の完璧さを求める欲がそれらを招いているとしており、その指摘は本書の主題を踏まえたもので、事実認識と時代区分にかかわる内容を含んでいる。

日本を含むアジアの環境史を研究するアヴェネルは、1970年代以降から現在に至るまでの部分の考察を高く評価し、特に70年代を戦後史の転換点と見ているシナワの議論と自身の研究の知見とが共鳴する部分を探り当てている。それは、人々に活発な行動が見られた点の分析に求められるが、1980年代に結成されていくNGOとの関係などについて目を向けておく必要性も指摘している。さらにアヴェネルは、本書の射程を平成史につなぎうる点にも言及している（Avenell 2020: 3）。周知のように、社会史的にも政治史的にも、平成という時代を振り返り、戦後史のなかでそれを相対化する試みも始まっているし（たとえば、小熊編 2019; 清水 2018）、そこでの浪費の位置づけを検討しておくことは、本書の含意とも結びつくだけに興味深い指摘である。

本書が浪費を通じて戦後日本を捉えることに強い関心を示しており、その貢献を各評者が認めていることは先に述べた。シナワが戦後に議論を限定する前提（p. 12）を踏まえた上でなお、歴史学の視点からカパァが指摘したのは、戦前の考え方がその後の浪費の動向にどのようにつながっているのかということである（Kapur 2019: 953-954）。戦後との連続性の有無を問う確認であり、この問いも時代区分とかかわるといってよい。

この点についてはすぐ後で再び触れるとして、時系列の前後の検討に加えてカパァの関心が、いわば左右の検討としての他国との比較をしていない点にも向けられていることを確認しておきたい。カパァは、日本での浪費意識が、しばしばごみ・廃棄物の量に対して識別できるようなインパクトをほとんど与えていないことをシナワは暗に問うけれども、そうした議論がどの程度の汎用性を持つのかを尋ねている。確かに、シナワは序章において浪費が先進国に共通することであるとの認識、裏返すと日本を特別視しているわけではないとの認識を示したり（pp. 8-9）、終章で南アジアのブータンの状況を引いて、浪費と幸福な状態との関係も語ってはいる（pp. 299-305）。しかし、体系的な比較の意図からそうした点を論じているわけではないので、

カパァはそれを今後の課題と見ているのだと思われる。

ここまで、各評者が析出した論点を時代区分を意識しながら見てきたが、それぞれの指摘については概ね首肯できる。本節で付け足しておきたいのは、本書の構成を成す時代区分の背景にある考え方を問う必要があるのではないかということである。

シナワは、カパァが問う戦前と戦後の連続性に関しては特に語っていないが、明治維新後から太平洋戦争までの期間とその後現在まで続く期間がほぼ同じになってきている点に言及しながら、戦後を研究上の有意な期間と見ることができると強調している（pp. 12-15）。その見方は一旦留保するとしても、設けられた戦後の時代区分について、どのように受け止めればよいだろうか。

本書の記述は総じて経済発展と日常的な浪費の関係を軸に書かれており、その観点から時代区分つまり、本書の各部を構成していると考えるのが素直な見方だろう。それ自体については、どの評者も違和感を覚えることはなかったようである。ただし、本書はたとえば、第 2 部を 1971 年から 1981 年までと刻んでいるが、具体的に何に注目して時代区分を導いているのかは明らかではない。些末な指摘に見えても、時代をどのように分割し、認識するのかという点は重要である。というのもそれは、どのように事象を把握して帰納的に情報の整理をするのかの著者の判断、すなわち、歴史的な叙述の前提となる分析視角の措定とみなせるからである [2]。

ここで、上述のマクラクランの指摘に関連して（Maclachlan 2020: 1007）、時代区分はあれども、本書では全体的に、事例の記述がシナワの時々の関心の移ろいのなかで行われているように見える点について考えてみたい。そうした鮮やかな記述は長所である反面、ある時代に取り上げられた事例の前後の様子を読者が追いかけきれないきらいがある。本書は浪費や浪費意識という観点から見た精巧な戦後史の理解を与えてくれている一方で、その全体像を理解する各時代の設定の背景や浪費意識の変容を捉えていく際の考え方が把握しにくいのである。端的にいえば、本書での時代区分の意義はどのような部分に求められるのだろうか、ということである。その点が明らかになれば、取り上げられた個々の事例の意味づけが了解しやすく、重厚な記述がより統合的に理解できるように思われる。

時代区分と事例への言及の展開という話の流れで、第 2 部で中心的に扱われているごみ戦争を例として取り出して、今少し議論を広げておきたい。シナワがそれを論じた後の時期にも、焼却場の設置をめぐる問題などは発生し続けた。ごみ戦争には、関連する多くの報告（たとえば、寄本 1974）や比較事例研究（金 2016）があるが、本節の論点を考える上では、中澤高師が東京 23 区内における「自区内処理」というアイディアの盛衰を、4 期間（① 1971 年 -1973 年、② 1974 年 -1989 年、③ 1990 年 -1996 年、④ 1997 年 -2003 年）に分けて考察している点が参考になる。中澤は、ごみ戦争を 1 期に現れた事象として扱い、2-4 期の自区内処理に関わる問題が 2003 年に終息するまでの過程を検証している（Nakazawa 2018）。

一方、シナワにあっては、日常生活のなかで時々の事例に現れている中間層の意識が重要であって、ある事象もしくは事例を一貫して追う関心は必ずしも強くはない。確かに、ごみ戦争の後日談として、1998 年から稼働する新江東清掃工場に関する自身のエピソードも語られては

いる（p. 262）。しかし、中澤の研究にあるように（Nakazawa 2018）、ごみ戦争以降もそれにかかわる紛争などは、シナワが観察した戦後と同時代に発生していたのであり、そうした点が本書の記述に間接的に影響を与えた可能性をどのように処理しておくのかは重要と思われる。別言すると、時々に記されている様々な事例が、どのように、またどの程度前後の時期区分とかかわっているのかという疑問が、読者には置いていかれるということである。事実認識や研究の方法にも関連してくるが、都度扱われている事例がかなりの程度、状況依存的に見えるのである。

本稿で検討しておきたい第2の論点は、1点目とも関連してくるが、「中間層（middle-class）の像」とでも呼べるものについてである。「浪費の戦後史」を記すにあたって注目されている主役としての中間層については、1950年代後半にそれが登場していくこととなった社会経済環境や、層としての特徴について短く述べられているのみである。具体的には、基本的な質問項目が1958年以降現在まで続く政府の「国民生活に関する世論調査」を引きながら、本書では時期は記されていないが、約90％の人々が自らを「中流」と認識してきた点が、中間層に注目する主な根拠とされている（p. 309）。また、中間層としての自己認識が各自の社会経済的な状態の違いなどを超えて広く共有されていたのだとして、議論を進めている。さらに、2000年代に入って「不平等社会」や「格差社会」への関心が高まっているにしても、中流であるという自己認識は基本的に持続していると見ている（pp. 10-12）。つまり、浪費をめぐる戦後史は、多くの部分をこの中間層という存在を想定することで語れるのだというわけである。

この整理が適切さをもつとして、ここでは、その指し示す内容について検討の余地があることを略記しておきたい[3]。本書が中間層を想定して浪費の戦後史を論じている趣旨は、筆者も基本的に了解できる。だが、たとえば、引用されていないけれども、豊かさを謳歌する1980年代が議論されている第3部と同時期に登場していた、「新中間大衆」（村上 1984）といった中間層の諸相に関する概念や議論などを、シナワがどのように理解したのかは興味を引く。本書は、社会経済環境の変化などが実態として従来と異なるタイプの人々の登場を招来しているといった世相解説というよりも、あくまでも浪費への人々の意識や生活様式に絞った議論であるとして、村上泰亮のそれを横におくこともできよう。しかし、中間層と括られてきた人々は、「亜産者」であり、「批判性」が薄く「保身化」する存在である一方で、その時代の「産業社会、それを支えた近代科学に対して懐疑の気持〔原文ママ〕を抱き始めて」もいる新中間大衆と呼びうる存在なのだと指摘した村上の理解（村上 1984: 227-237）は、その後に流布したと考えられるし、むしろ本書の記述の内容からはそれとの親和性もうかがえる。

また、村上の分析が2000年代の不平等社会論や格差社会論の台頭（たとえば、佐藤 2000）おいて議論の素材となったほか、中間層の変化を捉えた戦後の社会史の蓄積があること（たとえば、吉見 2009[4]）なども考えると、長期にわたって時代区分を超えて移動していった中間層自体への言及がもう少しあってもよかったように思える。このくだりでいえば、本書とかなりの程度重なる期間を対象として、開発、発展、生産性にかかわる論点を検討しながら、人々の間に多様な考え方があったことを語り、日本での「アメリカ的なるものの賞賛」とその虚構性

を、「豊かさ」への幻想として剔抉した近年の著述もある（森正人 2019）。こうした研究成果と本書の関係は、どのように考えることができるだろうか。

ある情報や立論を出発点として論を進めるのは妥当であるとしても、シナワが日常生活のなかでの徐々に形成される微妙な浪費意識の変容に、しかも長期にわたって時代区分を措いて目を凝らそうとしたのだとすると、議論の主役としての中間層という存在についてまとまりのある見解を示しておく必要があったように思われる。シナワは浪費および浪費意識に着目した、活き活きとした社会史、文化史としての戦後日本の姿を読者に示しくれている。しかし、中間層としての人々自身の変容が日常生活の底流で起きていた可能性の検討については、必ずしも自覚的であったようには見えないのである。

4. おわりに

あらゆるモノ・コトは、時々の文脈などにおいて、不要にも無駄にもなりうる。戦後日本において、人々はどのように日常生活のなかで様々な価値を理解し、それらに意味を与えてきたのか。浪費の歴史の核心は、どのように人々が時代を生きたのかにあり、人々の多大な、そして徐々に変わり続ける関心、憧れ、悲嘆、希望を詳らかにすることが、歴史学者としてのシナワの研究関心であり、方法であった（pp. 3-8）。本書では、戦後日本の理解に歴史的な視点から貢献することが強調され、シナワは厚い記述を施すことに専念している。意図した通りに、「waste」を通じて戦後の一面が深掘りされたことは間違いない。

欲を言うと、別の角度から書かれた戦後史との関係でどのように本書を位置づけようとしたのかについて、踏みこんで示されていれば、より深く理解できたのではないかとの読後感は残る。また、日本の読者にとっては、既知の情報が多いと感じられるかもしれない。

しかし、これらは過ぎた要求であって、本書の精緻な調査やそれが示す事実の面白さ、さらにはそれらを包括的に再構成するシナワの力量や洞察の深さは圧倒的である。本書が映し出す浪費（waste）の多面性から、自らの戦後史の断片的な理解に気づかされる読者も多いのではないだろうか。筆者はその一人である。戦後を考察する際に「ごみ・廃棄物」への関心から入るにしても、「浪費」という本書の着眼点を共有することで、見落としかねない不要なモノ・コトがある可能性に目を向けることができた。この点に無自覚であったわけではないものの、ごみ・廃棄物の背景にあるもの、たとえば、社会経済、思想、価値、そして人々への理解を深めておくことの重要性について重ねて考えさせられた。

本稿は、「waste」をごみ・廃棄物に引き寄せ過ぎたきらいがある。けれども、本書の主題としての「浪費」を正面から読み取り、興味深い問いを投げかけている複数の書評に接することができたことからその相対化に努め、それらへの論評も含めた書評論文の体裁を取ることで本書にかかわる議論に貢献しようとした。もとより、本書は重厚な「浪費の戦後史」であり、深読みにつながると思われる論点をわずかに切開したにどどまる。ここでの検討以外にも、本書の知見の吸収や議論の展開の仕方は多々あるだろう。それらも参照しながら、いかに「環境」

の戦後史を熟考できるか。筆者についていえば、これが今後の課題となる。

付記　本稿は、基盤研究（C）（課題番号 : 18K01454）による研究成果の一部である。

注

[1] 本文中に記した分科会関係者のほか、嶋田暁文会員、松井望会員からも詳細な質問が出されたこと、また岩波（2020b）と澤（2020b）において、それらへの対応が行われたことをここに記す。なお、コロナ禍への対応として、報告論文などは日本行政学会ウェブサイトにおいて 2020 年 5 月 23 日に公開され、質疑応答の結果などについては 6 月 14 日まで掲載された。

[2]「時代区分」に派生する課題として、試論を記しておきたい。行論上の例示に過ぎないが、環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部企画課循環型社会推進室（2014: 3-10）は、「循環型社会に関わる法制度の歴史（戦後～現在）」を、五つの期間と三つの時代で整理している。すなわち、① 1800 年代後半から 1900 年代前半までの「近代化以降の状況」と② 1945 年から 1950 年代にかけての「戦後」を合わせて「公衆衛生の向上」の時代とし、③ 1960 年代から 1970 年代にかけての「高度成長期」を「公害対策と生活環境の保全」の時代と捉え、そして、④ 1980 年代から 1990 年代初頭までの「バブル期」と⑤ 1990 年代から 2000 年代までを合わせて「循環型社会の構築」の時代とするのである。これは、環境法制の動向に基づいた戦後の時代区分であり、「1. はじめに」で示した図の下部にある三つの矢印状の表記と重なる。

　このように話を進めてみたのは、経済発展とは別の観点からの戦後の時代区分があり、それとの関係でも「浪費」を検討しうると考えるためである。本書は、全 4 部を 1945 年から 1971 年まで、1971 年から 1981 年まで、1980 年代から 1990 年代初期の頃まで、そして 1991 年以降現在までとするから、上記の環境省の整理と捉え方が異なっていることがわかる。このようなズレのあるなかで、「浪費」はどのように考えられるだろうか。経済と環境とのかかわりを念頭に置いて、この両者の差異を微妙と見るにしても、戦後の事象の解釈や叙述の力点は異なってくるだろう。

　なお、両者に「ズレ」があるのは、たとえば、環境法制と（経済発展を軸に見る）浪費意識の把握という「区分の目的」の違いや、社会の変化の認知を受けて立法化にかかる時間･費用と人々の意識に上ってくる状況という「区分に反映する視点」の違いを考慮すれば、当然だと見ることもできる。また、公的決定の出力としての法制に着目すると時代を区切りやすいが、人々の意識については相対的に議論しにくい部分もあるだろう。このように時代区分の目的や視点、その作成の難易度といった点を検討してみることは重要だと考えられる。本節のくだりで注目しているのは、本書の時代区分の背景にある関心は何か、すなわちそれを導入している考え方は何かにかかわることなのである。

[3]「社会階層と社会移動全国調査」とシナワが依拠した「国民生活に関する世論調査」の調査項目の継続性について、いくつかの事例を示しながら、その「不連続性」を指摘している研究がある。後者の調査についていえば、現在と比較可能な継続データがとられ始めたのは 1970 年であり、調査項目の変更と中間層に関する議論（輿論）の台頭が重なっていることが明らかにされている（吉川 2012）。そこで指摘されているのは、「総中流化現象は輿論のフェーズでは『事実』であったが、世論を測り出す役割を担う社会調査のデータが、ピッタリとそのマグニチュードを数値にしていたわけではない、ということである。いまだ不確かだった日本の継続社会調査データは、輿論に迎合しそれを根拠づける方向で、爆発的な総中流化という数値トレンドを提出していた可能性がある」（吉川 2012: 24）という点である（吉川 2016 も参照）。

[4] 吉見の議論は、占領期において、一般的にはアメリカが豊かな国であり、いわば日本のロールモデルと

見る向きがあるなか、それに限らず様々な理解や所感を持っている人がいたことを指摘している文脈で引かれている（p. 24）。しかし、シナワが関心を寄せるその後の戦後の文脈では、吉見の議論についての包括的な言及はない。

比較論的な点に関連して、マクラクランの批評がある。シナワは、戦後初期の日本での社会批評が、アメリカを理念型として見､ジョン J. ガルブレイスの『ゆたかな社会（*The Affluent Society*）』を訳し、吸収していく際に、豊かさに関する警鐘を好意的に仕立て直したことを読み取るが、マクラクランの指摘はその確認の先にある。具体的には、どのようにそうした社会批評が戦後をやり過ごしたのか、また、その後の十年においてロールモデルとしてのアメリカに何が生じていたのかについて尋ねている（Maclachlan 2020: 1007）。

参考文献

岩波祐子（2020a）「イタリア食品ロス政策の展開」2020 年度日本行政学会分科会 A2 報告論文。

――――（2020b）「質問・コメントへの応答」2020 年度日本行政学会分科会 A2。

小熊英二編（2019）『平成史［完全版］』河出書房新社。

環境省（2020）『令和 2 年版環境白書・循環型社会白書・生物多様性白書』。

環境省大臣官房廃棄物・リサイクル対策部企画課循環型社会推進室（2014）『日本の廃棄物処理の歴史と現状』。

北村喜宣（2019）『廃棄物法政の軌跡と課題』信山社。

金今善（2016）『自治体行政における紛争管理――迷惑施設立地問題とどう向き合うか』ユニオンプレス。

佐藤俊樹（2000）『不平等社会日本――さよなら総中流』中央公論社。

澤俊晴（2020a）「自治体における食品ロス対策の執行問題――岡山県内市町村の状況」2020 年度日本行政学会分科会 A2 報告論文。

――――（2020b）「質問・コメントへの応答」2020 年度日本行政学会分科会 A2。

清水真人（2018）『平成デモクラシー史』筑摩書房。

中村和代・藤田さつき（2019）『大量廃棄社会――アパレルとコンビニの不都合な真実』光文社。

藤井誠一郎（2020）「コメント・質問」2020 年度日本行政学会分科会 A2。

村上泰亮（1984）『新中間大衆の時代――戦後日本の解剖学』中央公論社。

森正人（2019）『豊かさ幻想――戦後日本が目指したもの』KADOKAWA。

森道哉（2020a）「食品ロス・廃棄物の政策実施――岩波報告・澤報告に寄せて」2020 年度日本行政学会分科会 A2。

――――（2020b）「分科会 A2 の概要とまとめ」2020 年度日本行政学会分科会 A2。

吉川徹（2012）「総中流の輿論と世論」『三田社会学』17 号。

――――（2016）「社会のしくみと世論の距離」『放送メディア研究』13 号。

吉見俊哉（2009）『ポスト戦後社会』岩波書店。

寄本勝美（1974）『ゴミ戦争――地方自治の苦悩と実験』日本経済新聞社。

Avenell, Simon.（2020）“（Book Review）Waste: Consuming Postwar Japan. By Eiko Maruko Siniawer. Cornell University Press, 2018.” *Social Science Japan Journal* Published online 7 December 2020.

Haddad, Mary Alice.（2019）“（Book Review）Waste: Consuming Postwar Japan. By Eiko Maruko Siniawer. Cornell University Press, 2018.” *Pacific Review* 92（4）.

Kapur, Nick.（2019）“（Book Review）Waste: Consuming Postwar Japan. By Eiko Maruko Siniawer. Cornell University Press, 2018.” *The Journal of Asian Studies* 78（4）.

Maclachlan, Patricia L. (2020). "(Book Review) Waste: Consuming Postwar Japan. By Eiko Maruko Siniawer. Cornell University Press, 2018." *The American Historical Review* 125 (3).

Nakazawa, Takashi. (2018). *Waste and Distributive Justice in Asia: In-Ward Waste Disposal in Tokyo*. Routledge.

Siniawer, Eiko Maruko. (2018). *Waste: Consuming Postwar Japan*, Cornell University Press.